
外部評価委員会

平成20年度外部評価委員会

日 時：平成21年1月14日（水）15：00～17：00

場 所：なにわ・大阪文化遺産学研究センター 会議室

出席者：

<外部評価委員>

井上 宏氏（関西大学名誉教授／（社）生活文化研究所「上方研究会」代表）

永井芳和氏（大阪産業大学客員教授／読売新聞大阪本社社友）

森まゆみ氏（作家／地域雑誌編集者）

<なにわ・大阪文化遺産学研究センター>

高橋隆博（センター長／関西大学文学部教授）

藪田 貫（総括プロジェクトリーダー／関西大学文学部教授）

内田吉哉（特別任用研究員）

櫻木 潤（P.D.）

熊 博毅（関西大学学術情報事務局（博物館・出版担当）次長）

常行貞臣（関西大学博物館学芸員／事務局）

センターでは、「なにわ・大阪の文化遺産」に造詣の深い三名の方に外部評価委員を委嘱し、センターの調査・研究活動についてのさまざまな助言を得ている。平成20年度外部評価委員会が平成21年1月14日に行われた。

当日は、藪田総括プロジェクトリーダーの進行のもと、まず、高橋センター長より「中間進捗状況報告書」についての審査結果の報告がなされた。つづいて、今年度の活動と今後の活動計画について、内田特別任用研究員とP.D.櫻木が報告した。休憩の後、各評価委員より活動についてのコメントと今後の活動に対する提言をいただいた（次頁以後は、当日の評価委員のコメントと提言の抜粋）。



外部評価委員会

これまでのセンターの活動について

森まゆみ氏：「なにわの伝統野菜」への取り組みについては、東京でも、東京の昔野菜などをつくっているグループがあったりしますので、そういうところとの交流とか、比較文化的な点があればいいなと思います。それから、収穫した野菜を学内で皆さんが召し上がったりするのもいいかもしれませんが、オープンな大阪野菜の料理の会とか、味わう会とかをやってみるとか、というようなことになっていくと、またもっと広がっていくと思います。

私は、江戸東京フォーラムというものを、もう20年来やっておりまして、年間に三、四回は場所を決めて、まち歩きをしてから、そこの地域について研究している人の話を聞くということをやっています、シンポジウムなどもやるのですが、1度来た人には次から必ずメールで呼びかけをします。そうすると、参加者がどんどん増えてくるという感じがあるので、学外でも興味を持っている方にアプローチして、来ていただく方法のようなものを考えれば、また、そこから、人脈や、こういうのを研究している人が別にいるとかというのがわかっていったりして、広がりが出てくるかなということを思うんですね。

それから、聞き取り調査や副読本を作ることは本当にすばらしいと思うんですね。聞き取り調査は、大阪市ということですが、大阪全部で本当はやらなければいけないことだと思います。なかなかスタッフは大変だと思うし、人数もいないかもしれないですが……。



森まゆみ氏

井上宏氏：幅広い活動をしておられるので、「本当によろやっています」という印象です。特に、その方法では、例えば、水の問題でも、最上川と淀川という比較の視点は大事だと思います。大阪の研究では、大体、大阪しか見ませんね。大阪でクローズドという感じがします。大阪の人もそうしたものの見方をする人が多いんです。

大阪から情報発信と言うんだけど、やはりそれはもっと他と比較した中で、大阪を見つめるという視点というのは、僕は教えられたような感じがして、ああ、こういう方法もいいのではないかなというね、そんなことを感じました。

それから、いろいろな関心のある人をつないでいくという役割をセンターが随分果たしておられるんだなと思いました。クローズドじゃなくてオープンで、学者もそれから市民も、とにかく巻き込みながら進めていかれるという、なかなか難しいですが、よくおやりだなというふうに思いました。また、その中で研究だけでなく実践がともなう。まさに副読本をつくるなどはそうですね。普通、研究だけで終始するのでしたら、ちょっと面倒ですよ。だけど、それをつくりながら、またかつ学んでいくということはやはりそこで生きるんでしょうね。

いろいろな資料の収集、報告、聞き取り、という意味ではいろいろな方々の結束ですけれども、その現場に行くと、あるいは自分がやってみてとか体験しはりますよね、その現場の空気とか、人との出会いとか、副読本的に言えば、研究者自身の体験、その場で感じたことね、あるいは出会ってその人と対談をして感じたことなんか、何か、そういうものをもうちょっと残してほしいなと思います。少し面倒なことかもしれないけど……。

永井芳和氏：今、大阪では、文化が「冬の時代」というか、センターの近くにある国際児童文学館も閉館になります。それから大阪の子供の学力、この前の学力テストの結果が、非常に低いということで、烈火のごとく知事が怒ったというようなことがありました。

ところが、大阪というのは本当に教育がだめなのかということ、そうじゃないんですよね。先ほど、地域連携企画で平野へいらっしゃったとの報告がありましたが、平野でいえば津田秀夫先生が研究された含翠堂の歴史とか、もちろん懐徳堂とか、大阪は江

戸時代から学問の盛んな土地なんですね。日本の公立幼稚園を最初につくったのは大阪ですよ。幼稚園そのものは、東京が日本で最初ですけども。だから、そういう大阪の教育というものを、本当に、知事が烈火のごとく怒るとかいうようなところのものなのかどうかということも視野に入れられて活動されるというのもいいんじゃないかなと今、感じました。

そういう文化の冬の時代に、いかにセンターから、大阪の文化や文化遺産を発信されていくのかという点ですね。逆に冬の時代だからこそ、チャンスだと思えます。



永井芳和氏

ビジュアルな成果のためには

森氏：私は、「地方の時代映像祭」に携わっています。一極集中ではない、それぞれの地域の文化を大事にしようということで、各地の放送局がつくった番組などをコンペをして、いいものを選ぼうということでやっています。一昨年から関西大学に協力をいただいています。もちろん、在阪の各放送局4つとそれからNHKと民放連も関わってくださっているの、何かセンターと連携ができるんじゃないかと思っています。

また、関西大学の中にもビジュアルのことを専門にしている学部がありますよね。その学生などをリクルートして、学生の方たちの力でもってお撮りになるというプロジェクトもおやりになればどうかと思います。それから、皆さんもお上手だと思いますが、ホームページをつくるような力も学内から協力を得るなどすれば、ビジュアルな方面も強くしていけるんじゃないかなと思います。

井上氏：映像を残すということになってくるとちょっと片手間にいかないというふうには思うんですよ。今は誰でもビデオを撮影できるというものの、やはり上手でなかったらだめなんですよ。

ただ、記録としては、それは映像で視覚的に確認できるというけれども、情がある、見たらちょっとじんとくるとかね、何か訴えてくるものね、そういうものまで期待すると、スペシャリストが必要だと思えます。そういう意味で、ケーブルテレビ局や、あるいは近くのテレビ局にでも、どなたか非常に興味を感じてくれる、そういう映像のスペシャリストがいたら、そこまで少しネットワークが広がられるとそれもおもしろいと思います。そこまで求めると、少し目的がずれるかもわかりませんね。

関西大学でいえば、社会学部には実習でカメラを回している学生もいますし、実習が多いのでいえば総合情報学部ですとかね。総合情報学部にはそういうカリキュラムがあって、授業時間数でも、実習時間がたくさんあって、それに長けた学生がいます。

文化遺産を視覚的に、あるいは聴覚的に記録にとどめるという、活字のみならずということでは、やはり、スタッフの皆さんが手分けして撮る。それはそれで、意味があるんじゃないかとは思いますがね。そのほうがわかりやすいし、なかなか臨場感もあって、そういう意味では賛成ですね。活字だけというのは、やはりしんどいなというところはあります。

永井氏：民俗調査など、何を撮るかという部分、それとやはり先生方の指導、どれが大事なのかということをおっしゃれば、大抵の人は今の機械はいいですから撮れると思います。僕もぜひ映像で、民俗調査などをしてほしいですね。そういうものは、それだけを口で言われたり、写真1枚貼ったのでは、やはりわからないですからね。そういうところは重要だと思います。

これからのセンターの課題

永井氏：センターには、「なにわ・大阪」とについているんですけども、もう一つとしてはやはり関西という視点、京阪神という視点ですね。京都と神戸を含めて「三都」という視点で考えられたらいいんじゃないかなと思います。

先ほどのお話で出ましたが、大阪は、なかなか京都、神戸とうまく協力できない、そういう視野とい

うのが、なかなか持てないというところがあります。京都も大阪や神戸を見ないところもあります。京都と神戸は、大阪をとばしていろいろとあるかもわからないんですけれども。

もちろん大阪というものは大事にしながら、ぜひ、関西の三都というものを、大阪から三都を見るというような感じで進められたらどうなのかなと先ほどのお話を聞いていて感じました。

井上氏：「なにわ・大阪文化遺産」とありますが、「なにわ・大阪」を中心にしながらですけれども、私の頭の中にはやはり「上方」ということがありますね。京都や神戸、あるいは奈良も和歌山も、大阪の近在ですね。行ったり来たりして絶えず動いていると思うんですね。私は、うまく使い分けながらダイナミズムに動いているという、相互作用で影響し合いながら動いているところが非常に上方らしいなと思います。例えば、京都で懐石料理を食べて帰ってきて、大阪でたこ焼きを立ち食いしているみたいなね。その両方を大阪の人にはできるんですね。私はこっち派ということをおぼえず、うまいもんはうまいというような、いいものはいいという。そうした相互作用の一種のダイナミズムがやはりあるのかなと思います。大阪の人はその先頭に立っているんじゃないかなという気がしているんですね。

だから、「なにわ・大阪」だけではなくて、むしろ「上方」という視覚の中でそれを見つめ直すところがほしいですね。それは、奈良と大阪、京都と大阪、神戸と大阪など、どういう相互作用が、ありようがあるのかなという視点です。「なにわ・大阪」だけではなくて、周りとの交流とか、あるいは日本全体の中での比較をできたらなという希望はありま

すね。

森氏：成果報告書って、大体どこの研究センターもみんな大きいんですよね。これまでA4判のものが多いたのですが、半分ぐらいのA5判ぐらいのものをもう少し出してほしいですね。

あと、みなさんは大阪のことにお詳しいのに、やぶ蛇みたいなことばかり言いますが、我田引水なのですが、私はPHP新書で『明治・大正を食べ歩く』と『懐かしの昭和』を食べ歩く』を書きました。それらは食べ歩きグルメガイドではなくて、東京のごく昔、明治からある店の歴史を書いているんですね。だから、大阪といえばたこ焼きだとか、粉もんだというのではなくて、例えば、自由軒や北極星でも、昔からやっているまむし屋（鰻屋）など、それぞれのお店の聞き書きというか、歴史をきちんと書いたら、一般的にも、東京の人でも読みたがると思うんですね。そういうこともやっていただきたいし、東京からいうと、言葉のこともやってもらいたいですね。本当の大阪の言葉というのはどういうものなのかというのを知りたいですね。

それから、例えば、大阪の文化や歴史についての一般の人の質問を、ホームページなどで受け付けて、それについて調べてくれるという、そうすると研究テーマがたくさん見つかるのではないかなって思います。私も知りたいことがあって、“てっちり”とか“てっさ”というのがわかんないんですよ。私たち東京の人は、フグ鍋と言うし。また、なぜ大阪は派手な服を着ている女の人が多いのかとかですね。



井上宏氏